

吉永小百合さん語る

また吉永小百合さんである。写真は広島原爆から 69 年、今年の 8 月 6 日の朝日新聞 1 面掲載のインタビューである。レポートでも紹介しようと、切りぬいた記事を大切に保存しておいた。

終戦の年と同じ 1945 年に生まれた吉永さんの人生は、広島、長崎への原爆投下で幕を開けた「核の時代」と日本の戦後の歩みに重なる。吉永さんは「日本人だけはずっと、未来永劫、核に対してアレルギーを持ってほしい」と求めた。

2011 年 3 月の東京電力福島第 I 原発事故に関して、「--- 原子力の発電というものは、特に日本ではやめなくてははいけない。これだけ地震の多い国で、まったく安全ではない造り方、管理の仕方をしているわけですから。どうやって廃炉にしていくかを考えないと」

原発の再稼働や輸出の動きがあることには、『「さよなら原発」と私は声を出していきたい。みんなの命を守るために、今、せつかく原発が止まっているのだから、今やめましょうと」。そして「まだ毎日、汚染水など現場で苦しい思いのなかで作業していらっしゃる方がたくさんいる。そういう中で、外国に原発を売るといのは、とても考えられないことです」と述べた。

被爆・戦後 69 年となる今年、日本では戦争放棄をうたう憲法 9 条の解釈が変えられ、自衛隊が他国を守るために海外で戦う集団的自衛権の行使容認が閣議決定された。吉永さんは「今の流れはとても怖い。大変なことになりそうな気がしているんです」と懸念を示しながら続けた。「政治が悪いから、と言っている段階ではない気がします。一人一人の権利を大事にし、しっかり考え、自分はどう思うかを語らなければいけない」

こうしてインタビュー記事を打ち込んでいくと、吉永さんに同感するところが多く、ますます引きつけられた。吉永さんは体内被曝した主人公を演じた「夢千代日記」を機に、1986 年の東京の平和集会で原爆詩を朗読した。その後も朗読を続け、2013 年には福島県いわき市で朗読を行った。

今年の都知事選での原発メッセージについて。「日本の原発の事故を見て、ドイツでは原発をやめましょうと決めているわけです。でも、日本はそうじゃない。やめたいと思っている方はたくさんいると思うんですけど、声を出す人は少ないですよ。だからやっぱり、自分が思ったことは声に出したい、意思を伝えたいと考えました。仕事をしていくうえでネックになることはこれからあると思いますが、人間の命のほうが電力よりも大事じゃないか、という根本だけは忘れたくありません」

(2014 年 10 月 14 日)

